

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 31 日現在

機関番号：32627

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26590262

研究課題名(和文) インクルーシブ保育・教育において保育の質を支援する総合的システムの構築

研究課題名(英文) Construction of the system to support the quality of childcare in inclusive childcare and education

研究代表者

秦野 悦子 (HATANO, ETSUKO)

白百合女子大学・人間総合学部・教授

研究者番号：50114921

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：インクルーシブな保育・教育集団における遊びと生活を通し、保育を支援するシステム構築を目的とし、保育における活動参加への支援の調査と継続的アクションリサーチを行った。「保育活動参加における行動アセスメント」により「会話」「指示理解」「言語理解」「言語表出」「表出の特徴」「気持ちの言語化」を分析した。「保育における活動参加アセスメント」により「衝動性」「語用面の困難」「情動調整の困難」「場面適応の困難」「社会的関係の困難」「日常不適応」を分析した。保育支援を「個別配慮」「集団の調整」「言語・コミュニケーション」「保育士連携」から分析した。発達特性、障害特性、年齢、発達水準により検討した。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to construct a system to support children and childcare persons through play and life in an inclusive nursery / educational group. Specifically, we conducted action research on how support for participation in activities inclusive nursing practice was carried out continuously. Analysis was done from the following viewpoints. First, "behavioral assessment in childcare participation" That is "conversation" "understanding instruction" "language comprehension" "language production" "type of expression" "emotional expression". Secondly, "hyperactive impulses" "pragmatics" "emotional regulation" "scene adaptation", "social relations", "maladaptation", and the like. Thirdly, we clarified the content of support from the viewpoint of "individual consideration", "group adjustment", "language / communication", and "nursery teacher collaboration". The results were compared with the developmental characteristics (ASD, ADHD, intellectual disability), age (3, 4, 5), DQ level.

研究分野：発達心理学 特別支援教育 臨床発達支援学 言語発達学

キーワード：インクルーシブ保育 保育活動参加への支援 保育の質 アクションリサーチ 要支援児 行動アセスメント 臨床発達支援 コンサルテーション

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の学術的背景

知的障害を伴わない発達障害は特別支援の対象となる。また、境界知能は厳密には疾患ではないが、保育・教育現場を含む日常生活での社会的不利は少なくない。これらの子ども達は、乳幼児健診で把握されても継続的発達支援に至らず、幼児期における保育・教育集団で、3歳過ぎに不適応が顕在化することが多と指摘されている。また一方で、これらの子ども達は、就学前にその子どもの特性に応じた適切な対応や、安定した保育環境が満たされることで、活動からの逸脱や衝動性があっても日常的に適応的行動を積み重ねて行く可能性が高いことが指摘されている。

(2) 保育・教育場面での支援

幼児期の保育・教育現場において、子どもの特性に対する共通認識を持つこと、すなわち、①子どもの長所 (strength)、興味関心 (interest)、学習のしかた (learning style) を理解すること、②子どもに対して分かりやすい環境を準備し実行すること、③子どもが達成感を重ねる経験をどのように提供するかは重要である。

保育・教育現場で、子どものベスト・パフォーマンスを引き出し、他児や環境との相互的な関わりを育成していくこと、たとえばコミュニケーション、社会的関わりや応答性、遊び、行動、適応力などの各活動の相互的関連が必要とされる。

2. 研究の目的

本研究は、インクルーシブな保育・教育集団において、遊びと生活を通して子どもと保育者を支援するシステムを検討することを目的とする。第1に、日常の集団生活における遊びや活動に対する参加への支援を焦点化し、「関係の中の個人」と「日常活動への参加」をキーコンセプトとして、共同注意、共同行為を作り出す保育・教育面での介入と、集団内の関わりを分析する。第2に、上記のために、インクルーシブな保育支援としてのコンサルテーション型支援システムを、ひとつの自治体を単位とした活動システムモデルとして構築し、3歳児クラスから6歳児クラスまでのインクルーシブな保育・教育現場で活用しうる支援の試案の作成を行う。

3. 研究の方法

(1) 「保育場面における言語・コミュニケーションアセスメントシート」(瀬戸・秦野 2013) を用いて、ASD 児の保育場面における言語・コミュニケーションの特徴を分析した。対象は、A市において保育巡回相談の実施した者のうち、保育士によるアセスメントシートの記入協力を得た 104 件を分析した。

(2) 「保育場面での活動参加アセスメントシート」(秦野・瀬戸 2013) を用いた評価と、保育観察による保育活動参加への支援を分析し、保育における支援の枠組みを検討した。A市にて保育巡回相談の実施した要支援児のうち、保育活動の参加や対応が課題とされ、担任がアセスメントシート記入を行った中で、DQ50 以上の ASD 児 85 名を分析した。

(3) A市にて保育巡回相談後のフォローとしてのアクションリサーチとして、相談後に行われた保育活動参加への支援内容を明らかにした。2016年8月までの3年間にA市内公立認可保育所で巡回相談を実施した児 116 名を分析した。

4. 研究成果

(1) ASD 児の保育における言語・コミュニケーションアセスメント

表1 保育場面での言語・コミュニケーションアセスメントシート

<ul style="list-style-type: none"> ● 会話 <ul style="list-style-type: none"> ・質問をオーム返す ・会話がかみ合わない ・状況に合わない話をする、等 ● 指示理解(8項目) <ul style="list-style-type: none"> ・全体指示では理解できない ・状況理解で行動している ・話を聞いていないと感ずることがある、 ● 言語理解(7項目) <ul style="list-style-type: none"> ・単語の意味が理解できない ・言葉や文の意味を取り違える ・長い話だと理解できない、等 	<ul style="list-style-type: none"> ● 言語表出(7項目) <ul style="list-style-type: none"> ・発音が不明瞭(未熟)である ・語彙の数が少ない ・助詞の誤りがある、等 ● 表出の特徴(9項目) <ul style="list-style-type: none"> ・発話の抑揚が不自然である ・決まったフレーズの使用を好む ・大人びた難しい言葉を使う、等 ● 気持ちの言語化(5項目) <ul style="list-style-type: none"> ・要求を言葉で伝えられない ・言葉や文の意味を取り違える ・長い話だと理解できない、等
--	---

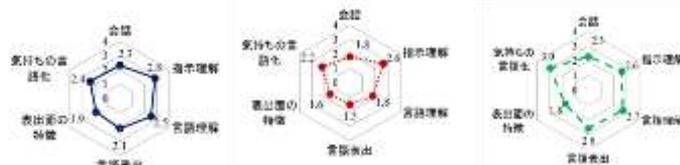


図1 ASD 児 (N=86) ADHD 児 (N=9) 知的障害児 (N=11)

①保育場面での言語・コミュニケーションの特徴を「会話」「指示理解」「言語理解」「言語表出」「表出特徴」「気持ちの言語化」からとらえることができた。

②保育における ASD 児の特徴として「指示理解」の困難、次いで「言語理解」の困難が顕著だった。ADHD 児の特徴として「指示理解」の困難が顕著だった。知的障害児の特徴としてどの領域も困難度が高かった。

③ASD 児 (N=86) における保育場面での言語・コミュニケーションの特徴を 3 歳児 (N=14)、4 歳児 (N=41)、5 歳児 (N=49) 年齢比較した。どの年齢でも「指示理解」困難が指摘された。一方、「気持ちの言語化」「会話」の困難さは年齢が高くなるにつれ減少した。

④ASD 児で DQ 値が明らかな 76 名を対象とし、DQ90 以上群 (DQ90-128) 47 名と DQ90 未満群 (DQ70-89) 29 名に分け比較した。DQ90 未満

群の方が言語・コミュニケーションの困難さがより顕著に表れた(5領域/6領域)。

特に「言語理解」では、DQ90以上群：2.2 < DQ90未満群：3.1であった。「言語表出」ではDQ90以上群：1.9 < DQ90未満群：2.5であった。

ASD児は保育活動において「指示理解」「言語理解」に特に困難が高い。保育士の困り感が大きいことが示唆された。また要支援児の年齢や発達水準により、困難さの内容や質が異なることが分かった。

(2) 要支援児の保育活動参加のアセスメント

表2 保育活動参加アセスメントシート

■「保育場面参加における行動アセスメントシート」の概要

- ・衝動性：突然、叫びたり、妨害したり、暴言をいう、順番にできない等
- ・語用論の困難：一方的な話しかけや保育者の話を最後まで聞かない等
- ・情動調整の困難：思い通りにいかなず気分が崩れると感情制御できない等
- ・場面適応の困難：新奇場面苦手、手先や身体の動き、養育者の支援等
- ・社会的関係の困難：好きな活動のみ関わったり、集団活動からの逸脱等
- ・日常不適応：こだわり、不注意、過度な甘えや依存、生活習慣の自立等

①保育活動参加については「衝動性」「語用論の困難」「情動調整の困難」「場面適応の困難」「社会的関係の困難」「日常不適応」の要因から構成された。

②年齢別にみた ASD 児の保育活動参加

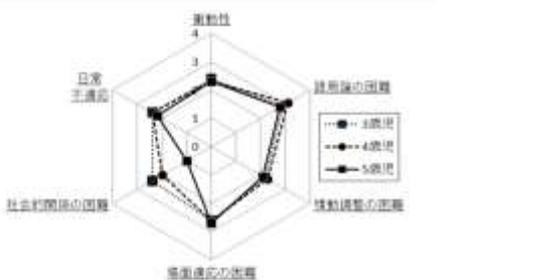


図2 年齢別にみた ASD 児 (N=85) の保育活動参加

ASD 児の保育活動参加について、好きな活動のみに関わる、集団活動からの逸脱等「社会的関係の困難」要因は 3 歳児 > 4 歳児 > 5 歳児と年齢により違いがみられた。「語用論の困難」「場面適応の困難」はほどの年齢でも高かった。「衝動性」「情動調整の困難」「日常不適応」もどの年齢でも時々みられた。

③発達水準による ASD 児の保育活動参加

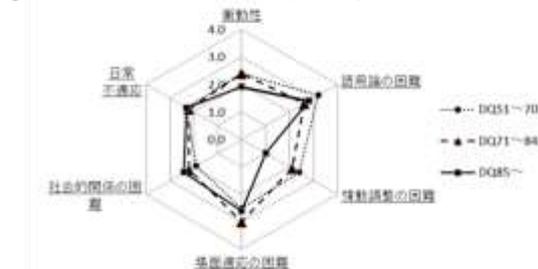


図3 発達水準別 ASD 児 (N=85) の保育活動参加

「情動調整の困難」「語用論の困難」「場面適応の困難」は DQ が高いほど減少した。「日常不適応」は年齢や DQ によらず、不器用や過

敏、視覚的優位という要支援児の特性によるものと指摘された。

④保育で特別な配慮を必要とする状況

インクルーシブ保育・教育において、保育士が直面する保育における特別な配慮を必要とする状況(新沼ら, 2014; 秦野ら, 2014)が明らかにされた。第 1 に、要支援児の気持ちの崩れた時に感情のコントロールへの支援が難しい。第 2 に、要支援児とクラスの他の子どもとの関係性に起因して生じるトラブルへの対応が難しい。第 3 に、要支援児の理解の仕方、興味・関心が、他児と異なるので、保育活動への対応が難しい、であった。

⑤事例を通しての分析

保育・教育場面における活動参加の枠組みの構築にあたっては、事例検討を積み重ねることにより以下のサイクルを明確にすることができた。まず要支援児に対し、「保育活動参加における困難さ」をアセスメントシートで明らかにし、要支援児の特性をとらえる。次に「保育士が日常直面している課題」との関係の中で、「保育の中でのインクルーシブな支援の具体化」を検討した。

(3) 要支援児への園生活上の支援内容

本研究では、これらの園内支援の内容から質問紙を作成し、保育士が巡回相談後に園内で行った支援の傾向について調査した。更に、要支援児の特性によって支援内容に違いがあるかを分析した。

表3 相談後の園での支援因子分析結果

因子	因子				固有値	SP
	1	2	3	4		
第1因子 個別の配慮 その子の発達に合わせた専用椅子、食器、玩具などの道具を用意したり、一斉行動を減らしたり、クラス活動への参加を無理させないようにしたり、遊びなどを通して、他児と関わる機会を作るようにしたり、指定のスペースやコーナーなど、その子どもが落ち着ける場所を用意したり、食事時間、切り換え時間などを調整し、スムーズに行動できるようにしたり、表面は平らななどのジョイスティックを使って伝えるようにしたり、その子どものロッカーを確保するなど、用具や物の配置を工夫したり、少人数で活動したり、小グループで行動するようにしたり	0.88	-0.23	-0.04	0.03	2.07	1.03
第2因子 集団の調整 手紙を書いたり、クラスの中で当番をするなど役割を持たせた、予定をホワイトボード、カレンダー、時計などで伝え、見直しを持たせた、集団活動の内容を、その子どもの興味や発達に合わせて、見直しを持たせたり、好きな子や得意な子と席を離したり、別のグループにした、監視員の良い子やモデルとなる子と一緒にしたり、同じグループにした、クラス内で担任に近い席や、担任の話を注目しやすい席を配置したり	-0.03	0.75	-0.04	-0.08	0.28	0.84
第3因子 言語・コミュニケーション これからのことを言葉で伝え、見直しを持たせるようにしたり、その子どもの気持ちや他の気持ちも代弁して伝えた、ほめて、その子どもに自信を持たせるようにしたり、分かりやすいように、短い言葉で、ゆっくり、はっきり、繰り返し伝えた、その子どもの話を聞き取り、気持ちを受け止めるようにしたり	0.13	0.17	0.70	-0.18	0.79	0.51
第4因子 保育士連携 担任以外の職員に協力してもらい、更に声をかけてもらったりしたり、担任が〇〇な時は〇〇しようなど、職員間で対応策を決めて申し合わせた、個別に対応する配慮をしたり、一対一で過ごす時間を取ったりしたり、担任の職員、フリー保育士の対応など、クラスに入る保育士を減らしたり	-0.03	-0.03	0.00	0.81	0.28	0.78
	0.88	0.76	-0.07	0.87	3.40	0.61
	0.24	-0.12	0.07	0.48	0.27	0.71
	0.31	-0.11	0.06	0.42	0.24	1.12
	0.83	0.70	0.70	0.74		
因子総和	1	2	3	4		
	0.32	0.32	0.50			
	0.48	0.32	0.23			

①「個別配慮」「集団の調整」「言語・コミュニケーション」「保育士連携」の4因子が抽出された(最尤法・プロマックス回転)。

②知的水準による比較では、知的障害群(DQ70未満、N=24)が、知的上位群(DQ71以上)より「個別配慮」が有意に高かった。他の因子では、両者の有意差はなかった。

③障害診断あり群 (N=30) となし群の比較では、障害診断あり群が「個別配慮」が有意に高かった。

④ASD 群 (N=13) と他群 (N=103) を比較すると、4 因子の得点に有意差はなかった。

要支援児の中で、知的障害を伴わない、障害診断のない児に対して、集団活動における他児との関わりで調整したり、言葉のかけ方やコミュニケーションの工夫、保育士連携する支援が行われた。

インクルーシブ保育・教育における保育士が直面する課題に即して、保育活動の参加という視点から「個別配慮」「集団の調整」「言語・コミュニケーション」「保育士連携」という支援が、年齢、発達水準、障害特性に合わせてシステム化された。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 6 件)

①秦野悦子、保育巡回相談に活かすアセスメント、発達、査読無、147、2016、pp.

②大畑茜、秦野悦子、保育園 3 歳児の半年間における仲間関係、生涯発達心理学研究、査読有、7、2015、pp.77-84

③秦野悦子、幼稚園における子育て支援としての預かり保育：ある自治体での現状と課題、白百合女子大学研究紀要、査読無、50、2015、pp.73-90

④田中有、秦野悦子、自閉症スペクトラム症状のある成人のライフストーリー、白百合女子大学発達臨床センター紀要、査読有、18、2015、pp.61-75

⑤秦野悦子、TEACCH センターにおけるアセスメントと支援、臨床発達心理実践研究、査読有、10、2015、pp.11-16

⑥秦野悦子、園における子どもの育ちを支える保育巡回相談、発達、査読無、139、2014、pp.51-54

[学会発表] (計 12 件)

①秦野悦子、瀬戸淳子、ASD 幼児の保育参加における行動アセスメント、日本教育心理学会第 58 回総会、2016 年 10 月 8 日～2016 年 10 月 10 日、香川大学 (香川県高松市)

②瀬戸淳子、秦野悦子、ASD 幼児の保育参加における言語・コミュニケーションアセスメント、日本特殊教育学会第 54 回大会、2016 年 9 月 17 日～2016 年 9 月 19 日、新潟大学 (新潟県新潟市)

③秦野悦子、要支援児に対する保育活動参加への支援 (1)、日本保育学会第 69 回大会、

2016 年 5 月 7 日～2016 年 5 月 8 日、東京学芸大学 (東京都小金井市)

④秦野悦子、瀬戸淳子、要支援児に対する保育活動参加への支援 (2)、日本保育学会第 69 回大会、2016 年 5 月 7 日～2016 年 5 月 8 日、東京学芸大学 (東京都小金井市)

⑤大島真理子、秦野悦子、瀬戸淳子、野村直子、新沼優理、伊東美咲、保育巡回相談を通じて保育士はどのような環境設定を行なっているか (1)、日本発達心理学会第 27 回大会論文集、2016 年 4 月 29 日～2016 年 5 月 1 日、北海道大学 (北海道札幌市)

⑥伊東美咲、秦野悦子、瀬戸淳子、野村直子、新沼優理、大島真理子、保育巡回相談を通じて保育士はどのような環境設定を行なっているか (2)、日本発達心理学会第 27 回大会論文集、2016 年 4 月 29 日～2016 年 5 月 1 日、北海道大学 (北海道札幌市)

⑦新沼優理、秦野悦子、瀬戸淳子、野村直子、伊東美咲、大島真理子、保育巡回相談をすすめるために保育士はどのように保護者の承諾を得ているか談での取り組み～、日本発達心理学会第 27 回大会論文集、2016 年 4 月 29 日～2016 年 5 月 1 日、北海道大学 (北海道札幌市)

⑧末葭啓子、秦野悦子、日常の保育の意味づけから保育士の専門性を捉える中堅保育士のライフストーリーから、日本発達心理学会第 27 回大会論文集、2016 年 4 月 29 日～2016 年 5 月 1 日、北海道大学 (北海道札幌市)

⑨秦野悦子、瀬戸淳子、保育巡回相談における保護者支援に向けて (1) 保護者の発達期待と家族の背景、日本特殊教育学会第 53 回大会、2015 年 9 月 20 日～2015 年 9 月 22 日、東北大学 (宮城県仙台市)

⑩瀬戸淳子、秦野悦子、保育巡回相談における保護者支援に向けて (2) 事例による検討、日本特殊教育学会第 53 回大会、2015 年 9 月 20 日～2015 年 9 月 22 日、東北大学 (宮城県仙台市)

⑪秦野悦子、瀬戸淳子、インクルーシブ保育における活動参加への支援 (1)、日本保育学会第 68 回大会、2015 年 5 月 9 日～2015 年 5 月 10 日、椋山女学園大学 (愛知県名古屋)

⑫秦野悦子、瀬戸淳子、インクルーシブ保育における活動参加への支援 (2)、日本保育学会第 68 回大会、2015 年 5 月 9 日～2015 年 5 月 10 日、椋山女学園大学 (愛知県名古屋)

〔図書〕（計2件）

①秦野悦子、ミネルヴァ書房、新臨床発達心理学第2巻、保育を支えるネットワーク、2017、p.350

②秦野悦子、東大出版、保育講座5 保育を支えるネットワーク、2016、p.350

6. 研究組織

(1) 研究代表者

秦野 悦子 (HATAN0, Etsuko)

白百合女子大学・人間総合学部・教授

研究者番号：50114921

(2) 研究分担者

瀬戸 淳子 (SET0, Junko)

帝京平成大学・健康メディカル学部・

教授

研究者番号：70438985